

表面脱灰による免疫組織化学染色への影響

◎安西 駿士¹⁾、長谷川 和子¹⁾、谷澤 純子¹⁾、細井 佳世¹⁾、香西 真裕美¹⁾、泉端 千恵¹⁾、塩田 真理子¹⁾、川崎 敦世¹⁾
四国細胞病理センター¹⁾

【はじめに】パラフィンブロックを薄切中、石灰化物により薄切が困難となる場合がある。薄切面に表面脱灰をすることにより短時間で再薄切が可能となるが、一般的に脱灰の作用を受けた組織は、免疫組織化学染色において染色性に影響を及ぼすことが知られている。今回、表面脱灰による免疫組織化学染色の影響について検討した。

【方法】脱灰液は、プランク・リュクロ液、10%蟻酸、K-CX (2倍希釈法)を用いた。材料は、肺、乳癌、虫垂組織を3mm角に分割し包埋、面出しを行い、表面脱灰を30分、1時間、3時間、24時間処理した。使用抗体はTTF-1、NapsinA、ER、PgR、HER2、CD3、CD20、CD79a、Ki-67をBOND-III (Leica)を用いて染色を行った。

【結果】プランク・リュクロ液とK-CXでは、脱灰の影響を大きく受け、TTF-1、Ki-67、CD3で、脱灰液に浸漬後30分～1時間で染色性の低下がみられ、24時間では陰性化している場合もみられた。ER、PgR、CD79a、HER2では、

浸漬後3時間で染色性の低下がみられた。

10%蟻酸の染色性は良好で、浸漬3時間までであれば染色性に影響が少ない抗体が多かった。

NapsinA、CD20は今回の検討では染色性の低下はみられなかった。

【考察】表面脱灰による免疫組織化学染色の影響について検討を行った。抗体によっては、脱灰液に浸漬して短時間で免疫組織化学染色に影響を及ぼすものもあるため、それぞれの抗体についてその影響を理解しておくことが必要である。脱灰液としては10%蟻酸による処理が染色性に影響が少なかったことから、表面脱灰を行う必要がある場合は、プランク・リュクロ液より10%蟻酸を用いたほうが良好であると思われた。また、どの脱灰液においても浸漬時間が長時間になると染色性の低下がみられたため、過脱灰にならないよう適正な時間で脱灰を行うことが重要である。

連絡先：087-899-6012 アンザイタカシ